

江戸時代後期の家相文献にみる住まいの配置計画

村 田 あ が

緒 言

江戸時代後期の家相文献には、「東の正当に井水あり。至って吉祥の備えなり。且つ、東方より南の隅に寄る事宜し。北に寄る事を好まず。」(『家相図解』)、「坤隅の地に土蔵あるは、大おおに凶なり。家内病多く、且つ子孫虚弱を司る。」(『家相図説大全』)のように、屋敷の敷地内の如何なる方角に何が配置されると吉である、或いは凶である、という表現が多くみられる。

前者は「住まいの東側正面に井戸があれば大吉であり、それが南側に多少寄っても吉であるが、北側に寄ると凶である」ことを示し、後者は「屋敷の敷地内の南西方向の隅に土蔵があると大凶であり、家内に病人が多く、子孫も虚弱となる」と言っている。

これらは家相文献の中心をなす吉凶判断の表現であり、母屋をはじめとする屋敷の敷地内の建物や門、庭を構成する諸要素の総てについて同様の判断が下される。人々は、自らの住まいに引き当てな

がら吉凶を計り、或いは普請の際に指図を前にこれらの判断を吟味したものと推測される。

本稿では、江戸後期の一人の家相相者が著した二種類の家相文献を取りあげ、その中に前述のような吉凶表現を追うことにより、この家相相者のいうところの屋敷の敷地内の建物配置について考察し、当時の住まい造りの一端を探ることとする。

一 『家相図解』と『家相図説大全』

本稿で分析に用いる家相文献は、『家相図解』と『家相図説大全』であり、二書とも松浦東鶏の著作である¹⁾。松浦東鶏は江戸後期に畿内で活躍した家相相者であり、松浦派と呼ばれる家相流派の始祖である。松浦派は東鶏が起こし、甥の松浦琴鶴がこれを継承し発展させた。

『家相図解』は寛政十年(一七九八)に刊行された上下二巻の版

本であり、全一四八頁の家相文献である。版元は東京、京都、大阪の計五軒の書肆である。その構成上の特徴は²⁾、門戸に関して比較的詳しく言及している点である。

『家相図説大全』は享和元年（一八〇一）刊行の、上中下巻よりなる版本であり、全一九四頁の家相文献である。版元は前書同様に三都の計六軒の書肆である。住まいの敷地選択に関する部分と、住まいをめぐる禁忌に、特に紙数を割いている点が特徴である。

この二文献を本稿の分析の対象に選んだ理由は、同一著者による刊年も比較的近い文献であり、ともに江戸時代中、後期の家相文献の中では一般的といえる構成の文献であることから、余すところなく著者の主張を読みとることができるものと判断したためである。なお、ここでいう一般的な構成とは、文献の構成上、各項目のウエイトの置き方がバランスの良いものである。

家相文献には、暦との関連性を重視したものや、中心の取り方に執着するもの、敷地選別に主眼を置くもの、吉凶表現（どう崇るのか、といった具体的な影響に関する記述）の密度の濃いものなど、それぞれに特徴がある。先に述べたとおり『家相図解』、『家相図説大全』の二書にも構成上の多少の特徴があるが、これら二書は、家相の必然性、地相、門戸、敷地の形状、住まいの外形、敷地内の諸屋、住まい内部の間取り、竈・廁・神棚・仏壇、井戸、鬼門の禁忌という様々な項目について過不足なく説明している点において、一般的な家相文献であるといえる。

二 『家相図解』にみる住まいの配置計画

冒頭の書譜には「…四民の屋宅を造るに…凡そ家相の吉凶有る事を論せば、人の身体即ち小天地の理を備え、尋常に天地の化を地面家屋作爲の曲直、井戸土蔵雪隠窓門戸出入の所に受け、各陰陽五行³⁾の理を布く。又君臣夫婦親子兄弟或いは人身にして五体五臓に配当す。」とある。

住まい造りに家相の吉凶を採り入れる必要性を、中国伝来の「天地」の思想や「陰陽五行説」を引いて説明しており、天に随って地（家相）を調べ（天地の化を受け）ることが、人に影響を与えることを説いている。人に与える影響とは、吉凶禍福はもとより、五臓を五行に配当し、それらの五行の相剋⁴⁾により様々な疾患や災害を被る、或いは幸いに浴することである。

屋敷の敷地における配置計画について、以下に順を追ってみていくこととする（配置計画に係わる項目を順に①、②…と記す）。

① 地相吉凶の弁

この項では敷地の形状について述べており、四方平滑で南面に構える敷地を良しとしている。また地面の高低に関して、北が高く南が低い敷地を吉、形状は前が広く後ろが狭い敷地を凶としている。しかし、これらは「土地の風水に順う故に備え様々」であり、「土地の形象に随」っていれば後ろが狭くても吉の場合もあるという。

また、敷地の中央が高く四方が低い土地は吉であり、その反対は凶であるともいう。大方の判断は、往古からの経験的な住まい造りの方法に照らして何ら齟齬する点はないが、中には「遠見浩々たる地、自然と長寿の人少なし」や、「常に遠見をなすの家に住する人は、必ず健忘の病を生ず」のように、経験的な住まい造りでは説明のつかないものもあり、これらの表現や吉凶判断に本書の特徴が現れる。

②屋敷地形曲直吉凶の弁

この項は敷地の外形に関するものであり、十二支を方位に準えた十二方位⁵についてその方位が張り出る、或いは欠けた形の敷地についての吉凶を述べている。「子の方欠けたる地は、寡主と成るの兆しありて、後年衰微を主るなり。」や、「戌亥へ張りたる地は、吉相にして難ず所なし。」のような吉凶判断が方位の数だけ記されている。

まとめると大きな張り・欠けは何れにせよ凶であり、多少の張り・欠けを認めているが、乾と巽方向に少し張り出る形を良しとしている。艮・坤の二方は張り出ると「災害の兆し甚だしく、奇病、悪疾絶えざるの相」となり、欠けても「田庄倉庫離散して困窮の地相」であるといい、大凶の判断である。

ここでは経験的な住まい造りでは説明のつかない、所謂「鬼門」が問題とされている。鬼門とは陰陽道で鬼が入り出すといわれる、万事に忌み嫌われる方角（北東）であり、裏鬼門と呼ばれる南西

方向と共に対角線上に配されるこの二方向の形成する軸は、家相を問う場合常に問題とされる。

③方位を斜めに受くる土地の説

四方廉直な敷地ではなく、東西南北の四方が敷地の角に当たる形の敷地について記した項である。「屋敷、地面すべて山川の流れ、或いは街道に随い町作りを成すが故、次第に方角斜め」になる敷地や土地もみられるといい、実情に即した敷地選び、敷地の形状のあり方を述べている。

三都では斜めの敷地でも「市人繁栄を成す」ところがあると説き、斜めであるなしに係わらず、「東南の陽気を受くる」敷地は吉であり、「日影日中より初めて夕陽を前に受くるの地」は、一端繁栄しても後年必ず衰微するという。このように、敷地の日照が確保されれば吉であるという点に於いて、この項ではごく一般的な家造りを推奨しているといえる。

④三角鐘木形地相の図並びに説

三角形及びT字型の敷地について述べており、吉相とは言いがたい敷地であるとしている。論争が発生し、崇るといい、又神社仏閣などの跡地であるから障りがあるともいう。理由は不明解ではあるが、確かにこれらの敷地の使い勝手が難しいであろうことは想像に難くない。

⑤門戸吉凶の弁

本書のいう敷地とは、本宅の他に離れや蔵、庭などを広く囲うも

のであり、敷地には四方に門戸があると判断して良い。そこで、どの方位に門戸があると吉か凶かという判断が必要になる。門戸を構える場合も、敷地の外形から欠け込む形で構える門戸と、張り出す形で構える門戸があり、その両者について方位別の吉凶判断が必要であるという。

⑥ 門戸欠け込みで構えたる図解

西側の門で敷地内に欠け込む形の場合は、「財宝乏しからざる理を備えたる」門であり、南側の門は「南陽を受くるの備え」であり、大吉であるという。陽気を受ける、即ち日照を得ることを良しとしており、一般的な家造りの手法の一つと捉えられる。

⑦ 門戸張出て構えたる図解

東側に張り出た門戸で、門前に馬場を設けるものは「願望成就、立身発達」の吉相であり、南も良しとする。北側では「仕官の人は遠国に在番を成し、商家は他国に掛所あるか、何れ遠方の業用を成す」とし、「遠方」での吉凶を問うという家相説ならではの判断が下されている。

西側に張り出る門戸は「財宝集まるの相なれども、色欲によって散財を成すべき理あり。住人慎みを守るときは、散財の難これなく、財福増長成すべきなり。」といい、下世話な分かりやすい表現により読者の「慎みある行動」を説き勧めている。

⑧ 門戸不出不入して構えたる図説

敷地の塀に沿って門戸を開く場合は、南側と、西よりの北側のみ

を吉としている。西側を比較的良しとする例が多いのは、四季を方位に当てはめた場合、西は秋に準えられ、秋は穀物が実り、蓄えを意味することから「財福集まりたる」方位と認識されることによる。このように、日照などの機能的な解釈の及ばない場面では、様々な陰陽五行説にまつわる解釈が生きてくる点が家相説の吉凶判断の特徴である。

⑨ 家造り吉凶の弁

母屋の造り方について述べており、間口より奥行き長い形を吉とし、西に高く東に低い造り、北が高く南の低い形を良しとしている。奥行き長い住まいとは、近世の町屋の例を挙げるまでもなく一般的な家造りのあり方をいい、二階の載せ方は日照を得ることを一義にした手法である。

⑩ 同じ曲直吉凶の弁

屋敷の奥に別座敷や別建物がある場合のその方位について述べており、北西・南東側を吉とし、北東・南西側を凶としている。日照の都合というよりは、屋敷の外形が鬼門・裏鬼門の方角に張り出すことを避けていると見る方が妥当であると推測される。

又この項では庭の位置についても言及している。西南に庭がある形を良しとするが、「坤隅に至って大木有るを忌むの子細」があるという。これは、言うまでもなく大樹による日陰を心配しての記述と受け取れる。

⑪ 土蔵吉凶の弁

三 『家相図説大全』にみる住まいの配置計画

敷地内の土蔵の配置に関する項であり、東側にある土蔵は「家業繁栄を主る」といい、次には南側の土蔵を吉凶両断としている。

「南にて地の明きたるを吉とす。」とし、南側の土蔵による日照不足を避ける記述がみられる。

西側の土蔵も吉凶両断とし、「尚土蔵の備えに依って判断の次第甚だ多し。」といい、土蔵の判断の難しさに言及している。

⑫ 井戸雪隠吉凶の弁

井戸は東から南東、西から北西を吉としている。理由は特に述べられず、西の井戸は「財福全きの相」であるとのみ記される。雪隠は東西南北、乾巽坤艮の四方、四隅共に凶であるとされ、「百事不成」、「願望障りあり」、「家内口舌絶えず」、「他人に不和」などと凶の判断内容も様々である。これら八方位を少しづつ外すことをよしとしていると判断されるが、本文中にその言及はなく、どの方向に造る場合も凶であるから、よくよく注意して造営せよということかと推測される。

⑬ 池泉水手水鉢等の心得

この項の方位別吉凶は井戸の判断に準ずるとし、井戸、手水鉢など、人々が日常に使う水はその判断が重く、池泉水などはそれよりも軽いという。日用に供する水の重要性を述べており、井戸水を飲料水、調理、洗濯、洗顔など日用の水に使っていた当時の衛生観念が偲ばれる記述である。

全項同様に本書の内容を順を追ってみてゆく。

① 発端

ここでは、地勢・地気の盛衰により吉凶が分かれることを述べており、又「風水大意」と銘打って家相を概説していることから、本書における家相説の扱いが、中国伝来の陽宅風水⁸⁾の流れを汲むものであることが分かる。「凡そ地理風水と称するも正に五行の順逆に依ってその生剋土地の興廢にかかるを觀察なすの術なり。」の一文は、まさに風水を説明するものであり、江戸時代後期の家相文献が中国伝来の風水説に依ったものであることを示している。

「土を鑑て地気の盛衰を察すの説」、「産石を鑑て土地の吉凶を試みるの説」など、敷地の土地の土質や石の種類によりその土地の地勢、湿気、火山の災害が及ぶ地か否かなどを観るといふ。これは現代にも続く住まいの敷地選びの際の確認事項であり、風水・家相が当時においては有益な「科学」たり得たことを示している。

中国における風水も、本来は土地の盛衰をその形状から読みとることから始まっており、その意味において江戸時代後期の家相文献にみる風水の解釈の方が、現代における歪曲された風水の扱いに勝るといえよう。

また、この項では四方廉直な敷地や間口より奥行きの長い敷地を良しとする点も述べられている。

②宅地曲直吉凶の図解

この項では、各方位別（十二方位）に敷地形状の張り欠けに関する吉凶判断が記述されている。飛び地が本宅から離れた場所にあるケース、敷地の一部を借地として他人に貸しているケースなど、様々な状況に応じた吉凶判断が示される。

方位別にみると、寅の方位を欠くことは「至って凶」であるという。鬼門に近い場所であり「意味深長の弁あり」ともいい、扱いの難しい方位であるとする。

辰の方位は、張り出す形は良く、四方廉直にみえても辰の隅を人に貸している場合は、辰欠けの敷地と認識され、凶であるなど判断が難しい。巳の方位は、張ることを良しとし、欠ける場合は「住主財福衰えの兆し」があるという。

未の方位は、大きく張ることを忌み、斜めに欠くことを良しとするが、深く欠け入る場合は却って凶であるという。この方位も裏鬼門に近くその影響を受けるとの解釈も記されている。申では、張り出ても欠けてもどちらも凶か吉凶交々という判断である。季節に当てはめるとこの方位は、「夏また秋に変じ」る時であり不安定であることを、火剋金という五行の相剋⁹を引いて説明している。

乾の方位は、敷地の形状として張り出すのは吉であるが、それに応じて建物の形状も共に張り出すと凶に転じるという。又、欠ける形は凶である。季節は秋に準えられるので、「穀物取納^{とりいれ}の時を失うの象」となるからであると説明している。亥の方位は、張り出る形

を吉としている。

丑の方位は、大きい張り出しを凶とする。この方位は一年に準えると「一歳中四時の終わりを止め」るため、「死の位」であるという。又、この方位に敷地と建物の両方の凶が重なることを特に禁じている。鬼門に近い方位ならではの判断である。

卯の方位では、張り出る形を「至って吉」としている。「凡そ東方卯の方は上^{のほ}るの地氣にして、草木萌^{きざ}し芽を出すの時候に当たる」からであるとする。午の方位では、程良く張り出すことを良しとしている。酉の方位は、「中秋を司り、穀物専ら実るの時に当たる」ため、張り出ることを良しとする。子の方位は、張り出ることを吉とし、欠く形は大凶であるとする。

乾の方位は、別名「天門」といい、張り出す形を吉とする。坤は「人門」であり、少し欠ける以外は凶である。巽は「風門」であり、張り出す形を「吉祥興栄」であるという。艮は「鬼門」であり、斜めに僅かに欠ける以外は何をして也大凶である。「鬼門剋殺の凶地」であるといい、きびしい判断が下されている。

③家宅の備え吉凶の図解

この項は敷地内の本宅の形状に関する吉凶をいい、四方廉直を最上とすることが先ず述べられている。張り欠けによる吉凶は、概ね前項の敷地の張り欠けによる吉凶に準じるとする。東側に座敷が張り出す形は吉であり、欠け込むと凶である。南は大きく張ると凶であり、欠け込む形も凶である。唯一「少し欠けたるは強いて難ずる

ことなきなり」という。

西側の離れ座敷は吉であり、欠け込みは凶である。北側は張り出す形が良いという。

巽の方位は張り出す形が吉、欠ける形は「忌み厭うべきの不吉相」であるという。坤は張り出ても欠けても凶である。乾は張り出す形が「寿福全きの吉相」であり、艮は張り出すと「艱難も繁き」相であるという。欠けても凶であるが、少し欠け込む形は「家人無病安穩にして百事全きを司る」好相であるという。

④宅外の備え各々吉凶の弁

この項では、門戸、土蔵、納屋物置、井水、浴室、雪隠、築山、池泉水、手水鉢の配置について述べている。先ず門戸であるが、門は「一家の禍福およそこれより」とされる「要所」であるという。乾の門は吉であり、西の正当は避けよという。坤の門は凶、巽の門は吉、艮の門は大凶である。なおこれらは表門だけではなく、裏門などにも該当するという。

土蔵については、巽の土蔵は「至って好し」であり、世に「辰巳張りの土蔵」と呼ばれる所以であるという。南の土蔵は吉凶交々であり、大きい場合は「南陽を防ぐ」ため良くないという。坤の土蔵は「大いに凶」であり、真西の土蔵は「至って宜なる構え」であるという。乾の土蔵も吉であり、真北の土蔵は「大概無事」である。艮隅の土蔵は「疾病災害絶えざるの難相」であり、真東の土蔵は良相であるという。

納屋物置は、土蔵の判断に準じるといふ。その場合、土蔵の判断の方が重く、納屋物置に対しては「その理前軽薄」とあるという。

井水に関しては、辰の井戸は大吉、巽隅は「いよいよ興福」、巳の井戸も「相次いで宜なり」といふ。真南は大凶、坤隅は「子孫の不辛」を呼ぶといふ。真西の井戸は良相、乾隅は「良き家来出来する」吉相であり、北の井戸は「大概無事」である。艮隅の井戸は「剋害鋭きの難相」とあるといふ、真東の井戸は吉である。井戸の備えの善し悪しは吉凶の影響が大きく、家人が日々飲料水として用いる場合はなおさらであるといふ。

浴室は、巽隅を吉、辰、巳共に吉としている。真南は凶、坤隅も凶。未寄りは無事であり、申は「宜なり」といふ。真西は吉凶両断であり、乾は不吉、戌は無事、亥は吉、真北は「吉凶判断交々」であり、艮隅は「至って凶」であり、丑は「障りなく」、寅は吉である。真東は「大抵無事」であるが「些か不祥を兼ねる」こともあるという。浴室を敷地内に設ける場合以外にも、「宅内居風呂」も同断であるといふ。

雪隠は、どの方位にあっても凶であり、それぞれに「目上の人に對して心労を抱」いたり、「住者往々禍害」があるなど、その配置は極めて難しいが、「四方四隅の正当を除けてその中間に」構える場合は「大要無事」とあるとする。

池泉水の配置は、坤は不吉であり、南、艮も大凶であり、北は「半吉半凶」、東は僅かに吉、西は吉、乾と巽が大吉相であるといふ。

築山は、南にあるものは半吉半凶、西、乾、北は「至って吉」、坤、艮は大凶、東、巽は不吉であるという。

手水鉢の据え所は、巽隅は吉、南、坤、艮は凶、その他は吉であるという。手水鉢は小さいものであるが、日々使うものであり「その働き繁きが故に」、吉凶の理前は重いという。日用の水の衛生を重視する姿勢がここにもみられる。

四 住まいの配置計画の緊要

以上のように、二書について住まいの敷地内の配置計画に関連する事項を追ってみたが、ここではその緊要とするところをまとめることにより、松浦東鶏が目指すところの住まいの配置計画像を明らかにし、併せて家相文献の意味するところについて考察したい。

敷地の形状、家屋の形状に関しては、四方廉直な形か間口より奥行き長い形を良しとし、周囲や地形に順応させるなど、比較的实际に合わせた記述が多くを占めるが、方位別の張り欠けをみると良坤の二方向の大幅な張り欠けを禁じている。その他には、二階の乗せ方や家屋配置に関して、敷地内の日照・通風を妨げないような工夫がみられることも重要な点として挙げられる。

また、敷地を選ぶ際にその土地の土や石まで吟味するなど、湿気や火山地を避けるという、一般的な土地選定方法を良しとしていることが窺える。これらから、家相をみるのが当時の「科学」たり

得た点もあることが指摘できよう。

門戸に関しては、住まいにおいて重要な意味を持つ部分として捉えられ、方位別吉凶を勘案するのみならず、門のあり方（塀より出張る門、引込む門、塀に開いた門）の違いに言及し、それぞれ方位別に判断している点により、門の重要性が明らかである。具体的な方位を挙げると、東、南、西の門が良しとされている。

土蔵の配置については、日照を妨げないための配慮と共に、方位に四季を配当する考え方から、西は秋を意味し、「五穀実る」方位であるため、「蓄え」を司る土蔵を配するという解釈がみられた。これは五行説の援用であり、家相判断に頻繁に用いられる手法の一つである。しかし、土蔵の他に納屋物置も別項として挙げ、しかも土蔵より吉凶判断の理は軽いとするなど、「蓄える」ことに対する執着が読みとれる点は特筆すべきであり、日々の生活において「余剰分を蓄える」ことの必要性を重視していた暮らしが読みとれる。

井戸は生活を支える重要な設備であり、この二書のみならず、どの家相文献においても重要視される家相判断上のキーポイントである。敷地の湿気対策という判断もあるが、それ以上に飲料水としての衛生面への配慮がなされており、「活水」と位置づけ、大切に扱われている。日用か否かを問うというスタンスは、日々の生活への視点であり、吉凶判断の内容に「疾病」が避けがたい凶判断の最たるものとして多く挙がること¹⁰⁾を裏付けるものである。

なお、池泉水、手水鉢も敷地内の水の要素として家相判断のポイ

ントになるが、これらは活水か否か、日用か否かが吉凶判断の重さを左右し、池泉水よりも日用の手水鉢の方が家相判断上は重要であるとみなされる点も興味深い。家相説を通して、住まいにおける衛生的な生活を指南する姿勢が明らかである。

雪隠も家相説では必ず問題とされる要素であり、どの方位においても凶であるという、極めつけの難物であるが、これは最早方位に關する吉凶ということより、どこに設けようが、清潔にし大切に扱わないと疾病を招くという警告であると読みとれる。

他には、吉凶判断の理由として五行の相生相剋を挙げるものや鬼門・裏鬼門の影響をいうものなどがあり、往古からの陰陽五行説、陰陽道の流れを汲む方位に關する禁忌の思想のあらわれとして分類できる。住まいにおいてある特定の方位を忌避するという発想は、自らがその空間の奈辺に位置し、どちらを向いているのかを意識することを意味しており、住まいにおける空間認知、および空間づくりの一手法として大変興味深い。

更に、凶判断においては、八方位の「正当を避ける」という表現や、大きな張り・欠けを忌み嫌い、「程良く」張り、欠ける形をよしとする姿勢が多くみられる点も特徴といえよう。「正当」を避け、微妙にずらすという概念は、日本の空間形勢において顕著であるようにも思える反面、中国における風水思想でも、「氣」の進入の勢いを殺ぐために微妙にずらしながら住まいの門を開けるといふ手法がみられる。この問題も、風水と家相の関係を解く上で重要なファ

クターであると筆者は認識している。

また、家相文献の表現には、凶判断の数が吉判断の凡そ二倍みられるが¹⁾、凶であることを強調し、読者の意識に印象づけることもさることながら、「無難」、「大抵無事」、「吉凶両断」という語を用いて黄信号を発し、「用心」を促す点も見逃せない。住まい造り上気をつける点を、「凶であるから崇る」と脅かし、「吉凶両断」であるとして不安を残すことにより一層の注意を喚起する姿勢が読みとれよう。

以上のように、松浦東鶏のこの二書からは、日照と通風の確保という、経験則に基づく一般的な住まいの配置を述べるとともに、家相らしさとも呼べる五行、陰陽道の影響を顕在化させ、さらには住まい造りの要点を織り込んでいくという姿勢が読みとれることが明らかになった。

五 結語

江戸時代末期における「科学」と、「住まいにおける生活の教え」が混ざり合った形での家相文献の様相が明らかになったが、つまるところ住まいとはそのようなものではないだろうか。構造、設備、機能的な平面計画などにより住まいの「器」を造ることは簡単であるが、その中には複雑な感情と思惟をもつ生身の人間が住まいするわけである。

家相説は迷信とされながらも今もなお、新築や改築の際に問題とされることが多く、又今般はマンションの一室の方位別吉凶をみる「インテリア風水」なるものも流布して久しい。かように人々は住まいにおけるある特定の方位に関心があり、それに現在の、そして将来の吉凶禍福を重ね合わせる。

江戸時代後期の家相文献からは、現代にも通じる、あるいは院政期にも遡ることのできる、住まいの空間における方位に関する禁忌の思想を読みとることができる。筆者はこの点に大いなる興味があり、「科学」だけでは成り立たない、生身の人間の住まいする場でありようについて、今後も探索を続けたいと思っている。

(本稿は平成十二年度科学研究費補助金の助成を得て作成している。)

*1 筆者は昨年度の本紀要第三十六集の拙稿「『匠家故実録』にみる建築儀礼」においても松浦東鶏の著作を扱っており、東鶏に関して詳しくは前稿を参照されたい。なお、分析に用いた底本は共に東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の版本である。

*2 この二書の家相文献の目次構成については、拙著『江戸時代の家相説』(一九九九、雄山閣)を参照されたい。なお、『家相図説大全』については、同書に翻刻を載せている。

*3 古代中国に淵源を持つ思想であり、万物が陰陽二気によって生じるといふ陰陽説と、木火土金水の五要素を万物組成の元素とする五行説からなる。

*4 前記の五行の相互関係の善し(相生)悪し(相剋)により、森羅万象の関

係性を説明するのが相生相剋である。また、五行は人間の臓器(五臓)や家族(父母兄弟姉妹)に例えられ、それらの関係性も五行の相生相剋で語られる。

*5 十二方位とは、東西南北の四方、乾(北西)巽(南東)坤(南西)艮(北東)の四隅に、四隅の両隣に位置する方位を時計回りに、艮の東寄りに寅、巽の東寄りに辰、南寄りに巳、坤の南寄りに未、西寄りに申、乾の西寄りに戌、北寄りに亥、艮の北寄りに丑のそれぞれを配するものである。

*6 敷地の張り欠けによる各方位別の吉凶に関しては、註2の前掲書に詳しく載せている。

*7 鬼門を忌み嫌う因習は、平安遷都の折りに、比叡山延暦寺を都の鬼門封じに建立したという『観学要記』の記述もある。院政期からみられる方忌みであり、現在にも生きる方位に関する禁忌である。なお、鬼門に関する陰陽道の視点からの考察は、村山修一『日本陰陽道史総説』(一九八一、塙書房)に詳しい。

*8 陽宅風水とは、渡邊欣雄によれば「人間の環境の風水、陽基風水」のことであり、風水とは「…人間生活のうえで生理的、心理的に満足のいくような環境条件を発見する方法であり、またその環境条件」であるという(渡邊欣雄・三浦國雄編『風水論集』一九九四、凱風社)。

*9 南に位置する火が、西に位置する金を剋する(溶かす)と解釈される。五行の相剋概念のうちの一つである。

*10 家相文献における吉凶判断の内容は、註2の前掲書に詳しい。

*11 家相文献の吉凶判断の数の比較は、註2の前掲書に詳しい。